

サンプル

高校生の頃に一目惚れした蓮先生♡蓮先生を追いかけて教師になって同じ学校の教育実習生として再開したの♡まさかの展開で蓮先生のちょっぴりSでエロエロな日々が始まった♡

そんな話です♡

◇ ◇ ◇ ◇

「佐倉楓です！本日よりよろしくお願いします。」
私は元気よく挨拶をする。この日をどれだけ待ちわびたことか。驚いたその顔が見たかったんだよなあ。卒業してから5年ようやく会えたね先生♡

簡単な挨拶を済ませると学年主任の先生が私の教育係に橘蓮先生を指名する。私は内心でガッツポーズをする。顔に出ないように我慢しなきゃ。蓮先生はと言うと...あはっ♡かなり困った顔になってる。

高校生の私を肯定してくれて支えてくれた蓮先生。もちろん当時から恋愛感情ありありだったんだけど全く相手にはしてくれなかった。わざとシャツのボタン開けてみたり腕組んで胸押し当ててみたりしたのに全くなびかない。どうにかして先生

の視界に入る方法はないかと考えた結果が私自身が先生になることだった。

「よろしくお願いします。蓮先生♡」

「ああ。よろしく。」

クールに決める蓮先生。当時35歳だったから今は40歳。あの頃よりも男らしさというかエロさが増している。ゴツゴツした指も血管の浮き上がった首筋もずっとずっと我慢してきた5年間。今日の前に蓮先生がいると思うだけでヨダレがたれそうだった。

「知ってると思うけど一応学校の案内と、あとは備品関係だな。教えとくから着いてきて。」

一通り手続きを終えた私に蓮先生が声をかける。私に気づいていないのかな？ってくらいクールな先生♡私は先を歩く蓮先生の後ろについて歩く。あのころも感じていたけどやっぱり背が高い。180センチくらいあるのかな。150センチに満たない私からしたら首が痛くなるくらい見上げなくては行けない。

「蓮せんせーい！デートですかあ？」

「蓮せんせーい！私ともデートしてくださーい！」

女子生徒から歓声が沸く。私は嫉妬でムツとして唇を尖らせる。前を歩く蓮先生がチラリと後ろの私を振り向く。
ふっ。と息を漏らして笑う。

「変わってねーな。先生らしくねえから唇尖らすのやめとけ」

ズキューンと胸になにか尖ったものが刺さる。変わってないってずっと私が元教え子だって分かってたの？♡わかっててクールだったの？♡格好よすぎてクラクラしそうだ♡軽い笑顔も口調もイケメンすぎっ！私は平然を装って「はい。」と先生らしからぬあの頃のような間の抜けた返事をした。

教室や体育館を回る。この学校の卒業生だからそんな場所なんて全部わかってるんだけど蓮先生は丁寧に案内してくれた。最後に化学室に入る。私がいちばん通った教室。もちろん化学が好きなんてことは一切ない。蓮先生が化学の先生だったから先生に会いに毎日か通った。

「懐かしいなあ。先生がまだこの学校にいてくれてよかったあ」

「お前も先生になるんだから俺のこと先生って呼ぶのはやめろよ？」

「蓮...さん？」

口にして顔を真っ赤になるのがわかった。先生と言う単語をつけただけで自分が対等な人間になったような気がした。蓮先生からはなんの反応もなかった。

「化学準備室はやっぱ見せてくれないんですか？」

この部屋だけは1度も入れてくれたことがなかった。どれだけ仲のいい生徒だったとしても先生と生徒という関係に変わりはない。今ならという期待と蓮先生の聖域にはふみこめないだよなという諦めとが入り乱れる？

「入ってみるか？」

ぶっきらぼうに蓮先生が言った。

「えっ...？いいんですか！？入りたいっ！」

喜ぶ私に少し呆れ気味の蓮先生が先導して準備室に入る。埃っぽい匂いと薬品のような匂い。まさに私が感じていた蓮先生の匂いだった。

「お前はあんまり入ることないだろうけど」

狭い空間に2人きりだ。胸が苦しくなる。先生が私の方を振り向いたタイミングで言った。

「蓮先生...？私のスーツ姿可愛いですか？」

どうしても聞きたくなってしまった。これは現役時代私が先生にしていたことだ。制服を着て同じ台詞を言った。せは「可愛い可愛い」と相手にしてくれなかった。スカートの丈を短くして聞いた時は怒られたっけな。淡い思い出が蘇る。あの頃と変わらずあしらわれるんだろうなと期待してなかったんだけど。

「ああ……すごく可愛いよ。」

蓮先生の返事は私の想像していたものと違って私は「ふえっ！？」と間抜けな声を出してしまった。顔が熱く赤くなってるのが自分でもわかった。

「自分で聞いて照れるなよ」

「だって！だって！だっ！！蓮先生がそんな言葉…」

蓮先生がゆっくりと近づいてくる。私の目の前で正対する。蓮先生の手が私のほっぺたに触れる「んっ♡」と声が漏れた。

「本当に可愛くなったな。いや、あのころから楓は可愛かったか」

再開して始めて私の名前を呼んだ。

「それって……どういうこと……ですか？」

蓮先生を見上げて言う。

「俺がどれだけ我慢してたと思ってるんだ？」

低音で優しい声が落ちてくる。ビリビリと全身を包むような優しい声。

「んあっ♡ふあっ♡んちゅ♡」

気が付くと先生の唇と私の唇が重なっていた。わけがわからないまま蓮先生を受け入れる。

くちゅ♡くちゅ♡ぬちゃ♡ぬちゃ♡じゅる♡じゅる♡

遠くから生徒の声が聞こえる。そんなことお構い無しに蓮先生はキスを続ける。唇を啄み舌が侵入してくる。

「んあっ♡っだっ♡だめえっ♡れんっ先生っ♡んんうつ♡あむっ♡」

「わりい。」

蓮先生はそう言って唇を離した。なんで？終わりなの？なんで私にキスしたの？言いたいことは沢山あるのに言葉が出てこない。私はかろうじて先生のスーツの裾をつかんで「やめないでっ♡」と懇願した。

じゅる♡じゅる♡ぬちゅ♡ぬちゃ♡

さっきよりも激しいキス。頭がクラクラしてくる。夢見たい。憧れてた蓮先生がこんなにも私を求めてくれるなんて。私は先生の首に腕を回して舌を絡める。

「はあ♡んあっ♡せんせえ♡んんっ♡」

「すげえ上手だけどかなり経験あったりするんの？」

「せんせえだけっ♡ずっと♡ほしかったのお♡んあっ♡あああっ♡」

「俺が初めてなんだな？」

「はいっ♡先生が……んっ♡はじめてですっ♡」

蓮先生は唇を話すと「そうか。」と嬉しそうな顔をして私の頭を撫でた。胸がきゅんとする。もしかして気にしてくれた？私が他の男の子としたことあるのかどうか。そんな自惚れもしたくなるような甘いキスだった。

「だったらこっちも初めてだよな？」

蓮先生のゴツゴツした手がブラウスの下から入ってくる。脇腹をかすめて胸まで到達する。ブラジャー越しに胸を触る。

「ひあっ♡んあっ♡」

「はじめてなのにそんな可愛い声を出すのか？」

蓮先生が意地悪な顔で言う。

「らってえっ♡んあっ♡男と人に触られるの初めてだからっ♡」

「誰に触られてもこんなになるのか？」

「ちがっ♡先生だからあ♡蓮先生だからこんなになっちゃうんですっ♡んんっ♡あっ♡」

「こんなエッチで悪い子じゃなかったと思うんだけどなあ。清楚で純粹だった楓はどこにいったんだか。」

蓮先生の手がブラジャーの中に入ってきて乳首を触る。
さす♡さす♡コリ♡コリ♡

「んんんっ♡声出ちゃうっ♡らめっ♡おかしくなるっ♡んんんっ♡」

ビリビリと体に電流が走る。蓮先生を思って自分で触ったことなんて何度もあるのに比べ物にならないくらい気持ちいい。男の人に触られるのがこんなに気持ちいいなんて。いや、蓮先生だからこんなに気持ちいいんだ。外からは相変わらず生徒の声が聞こえていた。これ以上声出すとまずいものと思ってるのに先生の手が今度はスカートの中に侵入してくる。私はギュッと体を身構える。

「せんせー??」

扉が開く音と同時に間延びした声が聞こえてくる。化学室に生徒が入ってくる。蓮先生は急いで私から離れるとスーツの乱れを整える。準備室の中から「ちょっと待っとけ」と外の生徒に声をかける。準備室から出る直前蓮先生は私を見て「今その顔で外出るのはまずいな。ここで隠れてろ。」と耳元で囁いた。その声にも反応してしまいそうになる。先生が準備室から出ていった。

私はその場にへたりこんだ。胸の鼓動がまだ止まない。何が起こったのか理解が追いつかなかった。学生時代何をしても靡いてくれなかった蓮先生があんなキスを私にしてくれるなんて。それとその顔で外に出るなってどういうこと！？と思いカバンから鏡を取り出して自分の顔を確認する。頬が真っ赤に染まり目は潤んでトロンとしている。自分でもわかる。発情している顔だ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「待たせて悪かった。」

生徒の相手を終えた蓮先生が準備室に戻ってくる。私は待っている間に出来るだけ落ち着きを取り戻すように努力した。蓮先生は私の表情を確認して少し困った顔になる。また私が唇を尖らせていたからだ。

「いつもあんな感じで口説かれてるんですか？」

私は準備室から蓮先生と生徒の会話を聞いていた。テストで分からないところがあったとかそんなことだと思っていたのに蓮先生は彼女がいるのかとか、デートしてよとかそんな話ばかりだった。私は明確に嫉妬していた。そんな私を見て先生は吹き出す。

「よく人のこと言えるなあ。楓はあんなもんじゃなかったぞ？」

「なっ！ そんなことないですよ！ もっとわきまえてたと思います！」

私はもっと膨れてみせるが聞く耳を持ってくれない。蓮先生は私の頭を撫でて「遅くなったな。そろそろ戻るか。」と言ってくる。突き放されたような気持ちになって苦しかった。わがまま言いすぎたかな？ もう嫌いになったのかな。そんなネガティブな事まで考えてしまう。

準備室を出ようとする瞬間。蓮先生を振り向かせて私から口付けをした。精一杯背伸びしてようやく触れることができた。「さっきの続きはしてくれないの？」と涙目で聞く。魔が差したとか、冗談だったらどうしようとネガティブなことを考えてしまう。先生は少しだけ考えて

「仕事終わり俺の家でな。」

と短く答えて職員室に戻っていく。私はパニックになりながらも蓮先生の後を着いて歩いた。ほかの先生たちが初日どうだった？ とか疲れたでしょ？ とか話しかけてくれたけどなんて返したかも覚えていなかった。私このあと蓮先生の家行くの！？ その事しか考えられなかった。



早く仕事を終わらせたいのに1日の出来事を書き記す日報の作成に戸惑ってしまう。急いで作業をしていると蓮先生が

私の机に小さくおられた紙を置いて行った。私はほかの先生にバレないようにその紙を開ける。そこには21時〇〇駅とだけ書き記されていた。

私は仕事を終わると急いで家に戻った。時間の猶予は少しある。軽めの食事をしてシャワーを浴びる。念入りに無駄毛の処理をして化粧をし直す。学生時代はメイクを禁止されていたし、今日も仕事柄薄めのメイクだった。蓮先生はどんなメイクが好きなのかな。どんな女の子が好きなのかな。頭の中は蓮先生の事でいっぱいだった。

支度を終えた私は約束の時間の少し前に駅に着いた。ここで待ってればいいのか？ 当たりを見回しても蓮先生の姿はない。夢みたいな気持ちでぼーっと立っていると少し離れたところから小走りでやってくるイケメンが輝いて見えた。蓮先生だ。

「ごめん！ 待たせたか！？」

蓮先生は息を切らせて私に駆け寄って言う。蓮先生はパーカーにデニムといったラフな格好だった。それなのにこんなに格好いいなんて。

「今着いたところなので全然大丈夫ですよ。」

平然を装って返事を返す。心の中では私服の先生が格好よすぎてパニックを起こす寸前だった。

「本当か？ 軟派とかされてないか？」

やけに焦った様子で聞いてくる蓮先生。いつもの冷静沈着な先生とのギャップにキュンとする。

「あはっ。大丈夫ですよ！蓮先生心配性なんですね」

私の言葉に冷静を取り戻したのか「じゃあ行くか。」いつものクールな蓮先生に戻る。私は慌てて蓮先生の後を着いていく。少し歩いたところにあるマンションに到着する。エレベーターに乗り込み5階まで上がる。その間無言の時間が続いた。その事がまた私のドキドキを加速させた。

「おじゃましまーす。」

と部屋に入る。シンプルな男の一人暮らしといった感じの部屋だが、やはりそこは40歳の経済力なのか最新の家電や電化製品が並んでいてオシャレな空間を演出していた。先に玄関に入っていた蓮先生が振り返り鍵を占める。かなり距離が近い。目の前に蓮先生の胸板がある。またキスされちゃうかも！？と思ったけど蓮先生は部屋へ歩いていく。蓮先生の大きな背中。もうすぐ手が届きそうなその背中に私は意を決して手を伸ばした。ギュッと後ろから蓮先生を抱きしめる。

「男の家に来てそんなことしたらどうなるかわかってんのか？」

「わかってますよ？私ずっとこうなれるの楽しみにしてたんですから。」

私の言葉に蓮先生が振り返ると視界がぐるんと回転する。少し遅れて蓮先生が私をお姫様抱っこしていることに気がついた。

「ちょっ！何してるんですか！？重いから！下ろしてください！」

私は手足をバタバタさせながら主張したが蓮先生下ろしてはくれなかった。そのまま寢室のベッドに連れていかれる。柔らかいベッドの上に優しく寝かせられる。ふわっと先生の匂いが鼻をかすめる。それだけでクラクラしそうなのに今、蓮先生が私の上に覆い被さるようにして私を見つめている。思わず目を逸らす。が、蓮先生によって強制的に前を向かされる。

「なんで目逸らすの？」

「だって……こんなの…嘘みたいだから。」

「嘘みたいってのはこっちのセリフだから！あの時どんな思いで楓の事諦めたと思ってんの？それなのに俺と同じ先生になって目の前に現れるなんて。もう我慢しなくていいよな？」

蓮先生の言葉は聞こえているのに理解ができない。諦めた？ずっと我慢してた？ほんとに！？

「ずっと我慢してたって...先生私の事.....んあっ♡あっ♡ら
めええっ♡んんっ♡」

蓮先生が私を黙らせるように唇を奪ってくる。熱い蓮先生の
唇と舌が私を発情させていく。少し遅れて私も蓮先生に腕を
回して舌を絡めていく。

ぢゅる♡ぢゅる♡くちゅ♡くちゅ♡

「ぷあっ♡んんっ♡答えてくれないのっ?...あっ♡んんっ♡」

「このキスで伝わらないのか？」

サンプルはここまでになります♡
ここから先はひたすらえっちな描写♡
初めてのえっち♡
2回戦えっち♡
寝起きのクリ責め♡